

# おんくいな

会報 第二十二号

発行日 平成十年十一月二十七日  
編集人 南洲吟道会広報局  
発行人 理事長 吉 永洲 神  
発行所 〒六五〇〇五 東京都中野区白鷺二一三四一五  
(株) 日本吟道学院南洲吟道会  
☎〇三(三三三〇)七〇〇九

## 本会主催 邦楽名吟会報告

吉 永洲 神

七月十四日(火)なかの芸能小劇場に於いて第二回邦楽名吟会は賑々しく開催された。前年度から予定してはいたものの多忙にかまけて具体化が遅れていたところ、「今年は無いのではなか」という他会の方(茅ヶ崎在住)の問い合わせに返される如く、先ず会員券の作成から着手し早速同券を送付した次第。(この問合わせをして来られた方は後日行われた日本吟道吟士権選抜選六段以下の部に於いて見事優勝された。流石、前向きの方は違ふなどホトホト感じ入った次第)さあ、それからが大変、種々の総本部関係等の事業の合間を縫って龍陽会長(三分けして、シナリオを作り、プロをつくり、(総て文字でお、家庭工業である。))配役を決め、稽古に指導に余念のない日々が続く。

そして迎えた当日、雙蓮前から続々と観客が詰めかけて来られ正に嬉しい悲鳴である。草月流師範増田江林先生をお迎えして、華麗なる華道吟で幕を上げる。続いて詩吟名人会優勝者、全国大会推薦吟詠者、同吟吟コンクール優勝者の名吟が続く。優勝を勝ち得て、かなりの年月を経ているにも拘わらず、みなそれなりのレベルを維持して見事である。民謡山中節は、中野鶴友翔師匠の三味線にのって湊山牙城さんの声が冴える。全員金メダルを胸にかけての、台吟コンクール優勝チームの台吟は、正に圧巻であった。

ご挨拶、休憩の後鶴陽こと龍陽会長の薩摩琵琶「西郷隆盛」の演奏である。西南の役勃発の由来から説き起こして隆盛自決に至る物語りは、聴く者をして涙せずにはいられぬ名演奏であった。高段者による律詩の合連吟、日舞、詩舞、山内さんによる珍しい琉球古典舞踊等、本日の吟詠に華を添えて頂いた舞の先生方有難うございました。今宵の「邦楽名吟会」に相応しい催しであったと思う。生け花と三味線の先生を除けば、総て本会員のみの出演であった。

明けて翌日、荷物の整理を終えて、芳名録にご記帳頂いた方々にご挨拶状と本会の紹介葉をお送りしたところ早速別記のようなお礼状を頂戴し、その達筆ぶり、ご心情に痛く感激したので敢えてそれをご紹介します(原文のまま)して、本会主催「邦楽名吟会」のご報告と致します。

拝啓

この度の貴会主催の邦楽名吟会にお誘い戴き誠に有難うございました。実に心が洗われる思いで視聴させていただきました感動いたしました。

特に薩摩琵琶による「西郷隆盛」の熱演は、当時の激戦を想起させる鬼気迫るものがありました。現在の日本は、歴史教育に極めて弱気になり、歴史観から修身的教訓を学ぶことさえできなくなりました。大変悲しいことです。

幕末の日本こそ二十一世紀への原点なのです。皆様の会がこの吟道を通じて、日本再興の好機をつくって下さればと念ずる一人です。今後のご活躍をご期待申し上げます。

お礼の言葉が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。一報申し上げ万寿 誠に有難うございました。

合掌

「明治を考える会」会主

理事長 吉 永洲 神 様  
侍 史

## 第二回指導者名吟大会構成番組 「カラッ風のかなたに」に出演して

龍陽会第一 浜 口 菖 祥

十月十一日滝野川会館にて指導者名吟大会は晴天に恵まれて盛大に催されました。

第一部の吟士権者選抜コンクールでは、一次、二次の予選を通過された方々で息の抜けない迫力ある魅力的な吟に驚かされました。特に福島県の関戸さんの「辞世」は真摯な吟で私は胸を打たれました。我が南洲吟道会の有坂先輩の「奥の細道」は女性で二本という声の低さで、みごとに最上川の急流の風景を彷彿とさせられる名吟であり、「新体詩の部」で準優勝されました。

第二部指導者名吟花舞台は少ししか聞かず残念でしたが、小泉先生のチームの「大楠公」は力の入った吟で三人の方々の品のある美しい着物姿と山内さんの舞をうっとり拝見させて頂きました。



第2回日本吟道指導者名吟大会にて「枯野の旅」の一コマ

第三部に入る少し前から舞台の袖でスタンバイしてました私達は、代表者の最後の吟で理事長先生の「青春抄」をしてみじみときかせていただき、ふと若かりし頃会社の創立者松下幸之助が常々、サムエルの詩から「青春とは心の若さである」と語られたのが昨日のように懐かしく思い出され、出演前の緊張を一瞬忘れることが出来ました。

第三部吟詠組曲「カラッ風の彼方に」のトップバッターの私は口の中がカラッ風で酸欠状態。龍陽先生も胃が痛む程心配された不安の中、牧水の「枯野の旅」は、秋の上州の風景をいとほしい程美しく歌いあげた詩を私達の拙い吟と菊田さんのみごとな舞で舞台は失敗せず終わることが出来ました。龍陽先生に感謝の気持ちで一杯でございます。大会関係者の先生方、企画段階から前日のリハーサル、朝早くからの準備とお世話下さった役員の方々、大変なご苦勞を頂き厚くお礼申し上げます。有難うございました。

## 第二回指導者名吟大会に参加して

座間会 宮 本 雅 龍

ある晴れた夜のこと理事長先生から電話にて第二回日本吟道指導者名吟大会に出場依頼がありました。驚きと同時に不安と責任の大きさが脳裏に先に立ったのであります。小泉先生、新村先生と私と三人で河野天籟作「大楠公」の連吟とのことでありました。

それからというもの私は私生活のリズムに異変が生じたのです。私の先生である岩井先生に相談とご指導を受ける日が続きましたが七本と云う声が出なく大変悩みました。毎日の練習の結果、どうやら出る様になりました。夢にまで出て「赤坂の城千早の屯」と大声をはりあげ隣に寝ている「孫」が「おばあちゃんどうしたの」と目を覚ますこともたびたびありました。

大会当日は心に決め、はりさけぶ気持ちで私が最初に吟ずる責任感ばかり知れぬ思いでありました。無事吟じ終わり、やっこの思い、どうにか責任を果たした気持ちで満足一杯でした。舞台から下りたとき足はガクガク震え、座り込む始末でありました。

この様な大舞台の経験をさせて下さいました理事長先生、会長先生に心からお礼申し上げます。今後はこの経験を生かして土台として吟道に勤しんで参りたいと思います。皆様のご声援有難うございました。これからもご指導よろしくお願ひ申し上げます。

## 祝 新 教 場 開 設

ご発展を祈ります。

☆こたまたま教場 開設 (10・7・11)

指導者 児 玉 智 龍 師  
場 所 所沢市狭山ヶ丘二二九九〇一三 児玉方

☆いずみ会飛鳥教場 開設 (10・9・4)

指導者 奈 良 藍 城 師  
場 所 府中市栄町三一〇一六 奈良方

## 新入会員ご紹介

どうぞよろしく

☆ 菅野 憲一(こたまたま) 会員No. 六一二

〒三五九一二五二 所沢市狭山二二五八〇一五四  
☎〇四二一九四九一五八九五

☆ 奈良 敦(飛鳥) 会員No. 六一三

〒一八三〇〇五二 府中市栄町三一〇一六  
☎〇四二一三六四一〇五七(ＦＡＸ)

☆ 水谷 道江(飛鳥) 会員No. 六一四

〒一八三〇〇五二 府中市栄町三一〇一六  
☎〇四二一三六六八八一一

☆ 葛川 清(習志野会) 会員No. 六一五

〒二七五〇〇二二 習志野市袖ヶ浦一一八七八  
☎〇四七四一五一一一八七八

☆ 佐々木節子(平松) 会員No. 六一六

〒一八五〇〇三三 国分寺市西恋ヶ窪二二一一二二  
☎〇四二一三三四一五四七一

☆ 坂本 憲(中町会) 10・10・24 会員No. 六一七

〒一五八〇〇九二 世田谷区中町四一五一二〇  
☎〇三三三七〇二一三五七〇

## 平成十年度秋の昇段審査結果報告

少年の部		級 名 計	
初段	五名	中伝	二名
二段	十三名	五段	六名
初伝	六名	六段	六名
三段	七名	奥伝	十四名
四段	五名	七段	二名
皆伝	十二名	十段	五名
九段	二名	助教	三名
秀伝	二名	教授	一名
範師	一名	計	七十八名
		総本部審査委員	計 二十六名

平成十年十月十八日(日) 指導局

## 教 場 だ よ り

### 若草教場からこんにちは

若草教場 青 木 泰 城

私達の教室は生徒数四名、女性ばかりです。場所は昇段審査会場になったこともある白鷺高齢者会館二階の一室です。時間は毎週金曜日(除五週)二時から四時までとなっています。が、大概時間オーバーして五時近くになります。

有坂先生の熱心なご指導に心から感謝しつつ、中身の濃い稽古に励んでおります。また、コンダクターもご指導頂いており、他の人が稽古を受けている時は、全身を耳にして先生の伴奏音をとらえ、合わせて弾きながら自分の物にしようと努力しております。休憩時間の楽しみは、先生のご持参のお茶と持ち寄りのお菓子、それに一段教養に役に立つ、おしゃべり、女三人奇ればか、(笑)です。年頃の女性が五人も集まれば、その賑やかたさ(笑)は想像できません。



若草教場のみなさん

春は鷺宮地区四つの老人会館の合同演芸大会が、秋には白鷺高齢者会館の演芸大会が開催されます。若草教場でも吟と舞で全員参加させて頂きました。先生が懐メロに詩吟入りの歌謡吟詠を一生懸命ご指導下さったお陰でどうかお陰でどうにかサマになりました。そして、嬉しいことに客席の

皆様も一緒に歌って楽しんで下さり、舞には拍手喝采を頂きました。未熟ながらも演芸大会出場は、度胸が付き、マイクも使える様になりました。私達は益々稽古に励み、多くの方々に詩吟のすばらしさを少しでも感じて頂けるよう頑張っております。今後ともよろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

次回教場めぐりは八王子会です。

# 平成十年度 吟行研修旅行 (鬼怒川・那須)

相談役 鈴木正龍

はじめに

今回の吟行会は、天気は上々、研修メニューもたっぷり、これぞ「吟行研修旅行」という名にふさわしい、実に充実した吟行会でした。

理事長、会長、両先生によるバスの中の熱のこもったご指導、あの雰囲気のある芭蕉庵での特別研修、そして会員同志が胸襟を開いての楽しい交流、等々。



黒羽・芭蕉の館にて

きつと参加された皆さんのそれぞれの胸に、楽しい思い出が沢山刻まれたに違いありません。  
このあと、第一部から第三部で一緒にそんな思い出のシーンのいくつかを振り返ってみたいと思います。

## 第一部

——理事長のごあいさつから——

冒頭のごあいさつで理事長先生は、南洲吟道会創立二十五周年記念大会へ向けての第一歩を、いままさに、このバスの発車とともに踏み出した旨を、わざわざ上着を着用し、威儀を正して述べられました。

私はこの時、一瞬、バスの中のムードがぐっと引き締まったように感じました。

続いて、記念大会のメインテーマ「相想う人間の情愛」について触れられましたが、これこそ

私達日本人の魂の原点であり、私達吟道に勤しむ者は、これを守り育て次の世代に引き継いでいく使命があると熱い思いで伺いました。

私達会員が心一つにして、このような素晴らしいテーマのもとに創立二十五周年を祝えることを誇りに思います。

——プロの実力——

ところで、あのドライバーとガイドさん、立派でしたね。これぞプロ中のプロというところを見せてくれました。しかも易々と。勿論天分ということもありかもしれませんが、日夜血のにじむような努力の積み重ねがあったればこそと思います。運転手さんの、とっさの場合での、あの驚くべきハンドルさ

ばき。ガイドさんの、あのよどみない奥の細道の名調子。私は、そのあまりの見事さに、圧倒され通して感銘さえ覚ええました。

## 第二部

——おいしいお話——

この間の台風で那珂川が氾濫し、「黒羽のやな」は大きなダメージを受けましたが、私達一行のために、「あゆのしおやき」を間に合わせてくれました。

あの鮎は天然もの、ホントに旨かった。  
私が感激のあまりあゆのしおやきを頭からがぶりやったところを、隣のテーブルにいた昔の娘さん達が、なんたる野蛮人！といったげな目でみていた(ような気がする)

で、私は、ガイドさんに教えてもらった珍味「あいのささやき」を今夜、女性軍の耳もとまでお届けして、名誉挽回をはかることにしました。

まずは、私の大好きな龍陽会長から(ここんところは理事長には内緒です)なんて、「あいのつぶやき」をいいながら龍陽先生に、かの珍味をお届けしようとしたのに、ああ、それなのに、それなのに、洲神先生の目が厳しく光っていてダメ。おまけに月までとっても青いから、残念だけど、遠回りして帰っておとなしく寝ました。

(十月十三日の日記より)

——大宴会——

さあ、お待ちかね、大宴会の始まりです。

トップパクターは、あやめ教場の浜美洲さん(詩舞)。渡辺洋吟さん(吟)のフレッシュ・コンビによる富士山。とっても初々しい見事な舞と吟に、先輩達も顔色なし。アンコールの声がかかり拍手が暫く鳴りやまない。

(以下、紙面の都合で幕間のカラオケは割愛させて頂きました。)次いで、八王子教場、横山治水さんが手練の手品を披露する。白い玉があっちからホイ、こっちからホイと現れては消える。そこで、みんな仲良く、あっちみてホイ、こっちみてホイ。

三番手は、龍陽第一教場の橋本禱龍(吟)有坂煌龍(舞踊)コンビによる名曲「影を慕いて」。有坂さんのめっぽうしおらしい顔の表情に、「ずっとそのままいて」なんて男性軍から野次が飛ぶが、ご本人からは、いつものきわどい反撃もなく、その顔には、いつ、どこで仕入れたものやら、哀愁までが……。

さて、お待ちかね、ハワイからやってきた総勢二十名の大舞踊団によるフラダンスが始まった。

みんな思い思いのカラフルなムーニーに花かんむりの装い。新村座長が「君知るや南の国……」と口ずさめば、一同、自慢の胸を揺らし、月になり、星になり、やしの木となって一斉にゆらめきながら、世の男性を誘いにかかる。さすがに腰の振りようは、みな年期が入っていて練達の域だ。

私も思わず、誘い込まれそうな衝動にかられる。座長から、ときどき「ささやき」などという悩殺指令もでていたようだ。ホテルの人達も廊下で見惚れている。おかももできてきて、一座丸ごとスカウトにかかったが、条件が折り合わずチョンとなる。ここで、龍陽会第一教場のAさんが、お得意の手品で満場のご機嫌を伺う。ハンカチ手品あり、筒・紐・カード・水芸と、そのレパートリーの広さにみな感心。圧巻は、千円札が一瞬に一万円札に早変わりする手品で、みんなホーと溜息を洩らす。

最後のとりは、船橋教場。広瀬一座による寸劇「名月赤城山」。お空には雁の代わりに、ミサイルが飛んでいる。「赤城の山も今宵かぎり」と親分。子分が別れを惜しむ場面は、あたかも、中小企業の親爺が、「仕事の山も今宵限り」と不況で永年勤めてくれた社員にお別れを言っているようで妙にリアルだ。笑うべきか、鼻水をすすって泣くべきか、珍妙な気分になったところで幕となる。

## 第三部

——碑はやはり碧空に聳えていた——

足永先生(仮名)「鈴木さん、ちゃんと立って発言して下さい」

い！「わたくし「ちゃんと立ってんですけど」足永先生「えっ？（と言って、テールプルの下を覗き込む）」わたくし「（声もなく、ひとり短足の身を嘆き悲しむ）」そんな私にも、ついにチャンスは巡ってきた。あの一吟洗心の碑が、碧空から半空に身長を縮めた（？）というのだ。

この耳よりな話は、理事長からもたらされたものだった。「ようし、勝負だ！」私はそう心の中で叫んだ。

もし、この見事な座高を活かして、一吟洗心の碑に勝れば、なんとこの私が碧空に聳えることになるではないか。然し、勝負は理事長の「一吟洗心の碑の前に全員集合！」の号令一発で、あっけなくついた。



那須・一吟洗心の塔前にて

いけない！そう、碑に近寄ってはいけないのだった。碑は、仰ぎ見るこの哀れな私を、愁いのこもった目でじっと見下ろしながら、然し、厳として碧空に聳えているではないか。

左様、詩文がどのように変わろうとも、その偉容に些かの変化のあろう筈もなく、あの尊師顕彰の碑は、今日も澄み渡った空のもと、那須岳を背景に堂々と聳え立っているつてある。嗚呼。

旅のおわりに  
— 身についた、うれしい話

A氏 「ねえきみ。今日の吟行会って、一吟洗心の塔にかね。」  
B氏 「なんだね。つまり、今日の吟行会で身についたもんは、なにかかっていうんかね。」  
A氏 「うん。まあ、そういうことだ。」  
B氏 「忘却とは忘れ去ることなり。……いけねえ、きれいなんたって、食って飲んだものだな。全くよく身についただよ（と、腹をさすり、胸をはる）」  
という訳で、この度の爽りの多い吟行研修旅行も、私達に数々の思い出を残して、幕となりました。

両先生！ご無礼の段、何卒ご勘恕の程を。実行委員の皆さん、それに今回ご参加の皆さん、大変お疲れさまでした。これからもどうぞよろしく願います。

この度は、楽しく有意義な吟行研修会をどうも有難うございました。

## 夏期大学に参加して

いずみ会 平松玉水

趣味の世界にも大学講座が有ることを知り、参加し始めてはや四年、年毎に感動の仕方は異なりすが、先生方の熱意、ご苦労を目の当たりにし貴重な勉強の場である事を痛感して参りました……。にも関わらず今夏は息子の赴任先のシンガポール行きが決まり八月十六日から十日間の予定で居りましたところ主人が「夏期大学どうするんだ」「勿論パス」「俺は帰るぞ！」の一言「しまった、一本やられた」の思いで二十一日帰国、運命の偶然か、その夜、洲神先生からのお電話で「夏期大学での実技研修で一吟する様申し込みました。出席者数の多い会から『水』の人を選びましたので頑張ってください。吟題は草魂です。」一瞬、ええっ！と思いましたが何事も勉強！それに好きな吟であるし、川口の舞台を踏めるなんて夢の又夢……。

当日、龍陽先生から「水は『みず』の吟をすれば良いですよ」と言われて頂き、出吟前には洲神先生からしつかりとご指導を頂いたので胸を張って吟じる事が出来ました。

講義の中で緑神先生は、龍神先生から出番の時は自分は作者だと言いつつ吟じると良いと言われたそうですが、草魂は吟に対する私の気持ちそのもの、踏まれても踏まれても、転んでも転んでも私ゃ起き上がる。この気概で吟道に精進したいと思います。

夏期大学も年々趣向をこらし、専門的な指導と判り易い内容など受講者の立場になって考えて下さり頭が下がる思いで二日間無事終了しました。講義して下さった先生方は勿論、我々の両先生に感謝と尊敬の気持ちを込め、来年も頑張らねば……。

## ナレーション・司会を試みて

龍陽会第一 湊山 牙城

いつのことでしたか、先生に、一度司会をさせて下さいとお願いしたことが切っ掛けとなり、それから司会やナレーションをさせて頂くようになりました。微力ながら朗読ボランティアを通して少しばかり読むことを勉強して来たことが、曲がりなりにも役だって居るようです。心掛けることと言え、いつも落ちついて穏やかな気持ちで、と自分に言い聞かせて、吟者が舞台に立つ前のあの緊張感を少しでも和らげて心地よい吟じ出しができますようにと願いながらマイクを持つことでしょうか。

ナレーションや司会がどうあれば良いのかについては私達の尊敬する先生のご指導を受けて、アクセントも言葉のリズムも、詩を正しく読むことも、全て吟じることと共通するものばかりのようですが、それがなかなかナレーションの場合は、誰にも理解出来る言葉でその言葉の間を大切にすることは減多にありませんので私は頂いた原稿を必ず自分の字で書き写します。そして何回も読み返し、内容を把握するのですが、書き写す場合は、写し違いのないように要注意、「困難」を一困難一と写し違えて失礼をしてしまったのは、かく申す私自身でしたから。

また司会の場合は、決められたことだけを読むのではなく、突発的なこと、例えば、内容の変更、落とし物、呼び出し等々があり、固有名詞の大切さに加えて表現力、思考力、言葉づかい等にも気を付けなければならぬのですが、日頃数少ない語彙の中で暮らしている私にはまだまだ力及ばず、勉強する事が山のようにあります。

何れにしても、感情を入れ過ぎたり、強い読み癖があると、聞く側が疲れてしまいますので、出来るだけ自然で素直な表現をしたいと考えて居りますし、それが何よりもその人の良さを引き出してくれるものと信じています。失敗を恐れていては進歩が無いと申しますから、これからも機会があれば頑張ってみたくと思つて居ります。

皆様もご一緒に挑戦してみませんか。

## 壮心大会に参加して

いずみ会 平松 誠 水

当日は、かくしゃくとした壮年紳士、淑女でさすがの南大塚ホールも満員盛況となりました。シルバー（八十歳）以上の方々も出吟されると言うのに、何と云っても皆様が若いのに驚きました。これは長年詩吟を嗜まれて日頃腹の底から大きな声を出している賜物であると思います。舞台ではシャキッとした美声で大向こうをうならせる、流石、名吟家の集まりであると驚嘆しました。

このように元老、師範格の先生方をはじめ終生現役でご活躍の方々が出吟されるとは知らず、二年前の大会に痴がましくも出吟して音程が合わず大失敗したことがありました。休憩時に最高顧問の星野玄神先生から先生ご自身のご経験などを拝聴させて頂き、「先刻の失敗はあたりまえ、なんども経験して詩吟らしくなる、これから益々精進しなさい。」と励ましの言葉を頂戴いたしました。

その後いろいろの大会などに参加させて頂くときには、課題詩の練習を十分に努めるよう心掛けて居ります。今回は、失敗を許されませんので、特別に阿佐ヶ谷教場で洲神先生から指導を頂戴いたしました。有難うございました。詩吟は三日三夜、日頃の練習のほか発表などの機会あるごとに参加して頂き、一日も早く皆様に近づきたいと思っております。指導のほど宜しくお願い申し上げます。

## 楽しかった日帰り吟行会

中町会 幹事長 相川 広水

早春の三月八日、好天に恵まれ、中町会員十六名が参加して日帰り吟行会が実施された。目的地は小田急線本厚木から程近い飯山温泉本湯旅館である。私は送迎バスに乗り遅れた会員を待つ後から合流した。大きな焼き物の狸が我々を歓迎してくれる。通されたのは離れの大広間ですぐ側には露天風呂がある。

全員そろったところで会長の挨拶。まず八十五歳を迎える小泉清城さんが「温泉の効用」と題して講演された。自作の十四頁にわたる資料は大変参考になった。



平成十年九月十九日  
中町会  
長寿祝賀の集い  
八十歳 三名  
船橋・金武・小泉  
八十五歳 一名  
小泉清城  
八十八歳  
岩坪博秀顧問

五周年を祝して乾杯の後、懐石料理で楽しいランチタイムが始まった。トンプク包みの色紙を開くと出吟ナンバーが書いてあり私は十三番だった。一番を引いたのは船橋春洲さん

で、誰も知らなかった隠し芸、坂東流日舞「白扇」を披露して皆を驚かせた。舞が終わるとマイクの前に立ち、「静御前」（和歌入り）を見事暗誦して吟じ二度ビツクリ。今年七十九歳の小柄な春洲さんに拍手が起った。

参加者全員が出吟番号順に熟吟し、温泉の効用か、いつも教室で聞くのとは随分違って皆、とっても上手に聞こえた。木城妙城さんが最後になり、二日後に紅白ペアーコンクールを控えて、本番さながらに迫力のある「勸学」を聞かせてくれた。（コンクールは船橋教場の山内久城さんと共にみごと優勝）印象に残ったのは小泉宗水さんの語り「水兵の母」で、約五分間の暗誦独演であった。皆感激し、小泉会長の目にも光るものがあった。温泉につかり、カラオケを楽しんで、あっという間に四時間が過ぎた。

今度は泊まりがけで来たいという会員の声。飯山観音は次の機会に拝観することにして、家路を急いだ。楽しい吟行会の日であった。

## その後の西郷どん

顧問 上村 健 祥

王政復古の論功行賞に当たって西郷どんは「維新の三傑」と云われ、藩士最高の正三位二千石を与えられたが、再三これを辞退し「位階だけで」と更に大久保にその辞退幹旋を頼んだ。その頃、政府高官は権勢榮譽に腐心し、百姓一揆などが多発し、維新失敗の感があった。明治五年七月、唯一人、陸軍大將元師近衛都督となり官規の肅正に努め、自らは家賃三円の茅屋に住み月十五円の、芋食い、焼酎飲みの清貧の暮らしであった。

征韓論の台頭に当たっては、極東各地の情報収集により韓国の弱体の実態を承知していたが、交渉に武力を使用することに反対、「責任ある全権大使を送って説得……それでもなお大使に危害を加えるようであれば実力を以て……」と述べ、征韓ではなく、先ず交渉を主唱し、その上その全権大使となることを願っていた。身の危険は十分承知の上でのことであった。外遊から帰国していた大久保、木戸欠席の閣議で西郷の大使派遣が決定され天皇も裁可されたが、「岩倉が帰朝してからその意見も聞いてみよ」とのことであった。その頃天皇からは「よきに処置せよ。韓国のことには西郷に一任する。」との内旨を賜っていた。そこで岩倉の帰朝直後には韓国に出發するものと思われていた。この対韓対応は国内の内政のゆきづまり解消や、武力侵略ではなく、当時の欧米による東洋侵略の情勢から隣接の弱国韓国を援けその独立を守ろうとするもので、武力を伴わずあくまで平和的交渉を意図したものであった。九月十三日、岩倉・伊藤が帰朝し「外征を急ぐべきでない」とのこと激論の末延期決定となり、大久保の工作により「使節不可」が奏上され、更に西郷からの直訴を阻止する工作もあったが、天皇は裁可された。後に天皇は「一旦許しながら途中それを取り消したのは過ちであった。」と仰せられたというが、別に、西郷の身の危険を感じられてのことであったとも云われる。「長袖大事を誤る」と西郷は即日参議、近衛都督、陸軍大將の辞表を提出した。その理由は「遣韓不可」もさることながら大久保・岩倉・三条の卑劣な転覆画策への反発であった。参議、近衛都督の辞任は許されたが正三位と陸軍大將はそのままとされ、天皇は西郷に「……もとより国家の柱石と依頼いたすの意に渝ることなし」と勅語を賜った。別に北辺ロシアとの情勢逼迫に当たって、これに備えて自ら北海道駐屯を志願したこともあった。これらは

中央官庁に花道を求めている大久保等に對し、難局の第一線にその死地を求めていた西郷の「命もいらす、金も名もいらぬ」奉公一徹の人柄の眞の姿であったといわれている。

明治六年十月、東京を去って鹿児島武村の自宅に歸るに当たり大久保・板垣の家を訪れ挨拶したが、互いに反目の感情は残った。殊に大久保は「いざ肝心のときになると直ぐ職を投げ出して」と批判した。これが竹馬の友の永久の訣別であった。

武村の自宅は玄関もなく庭を廻って座敷に上がる簡素なものでナポレオンの版画のほか飾りはなかった。以後西別府の耕地に農馬を使う田園生活に悠々自適、狩り、詩作に傾注する生活となった(以後のこと省略)



## 寒山寺

熱年教場 小宮正龍

中国江蘇省蘇州市楓橋鎮にある寺。俗に唐代の高僧「寒山」が草庵を結んだ地という。唐代の詩人「張継」の「楓橋夜泊」の詩に詠まれた寺として、広く親しまれている。唐代の高僧「寒山」と「拾得」がかつて遊んだ地ともいわれている。

「楓橋夜泊」の詩文について古来いろいろの説があつて、鳥が啼くのは夜明けであるのに夜半の鐘とはおかしいとか、夜半に鐘は鳴らぬものとか論ぜられ、そこで又鳥啼というのは山の名であるとか、夜半鐘は寒山寺の鐘の名であるとかいう説も現れたが、それらはいずれもこの詩が有名になつてから作られた名前であろう。

現在の寒山寺は、清の時代に再建されたもの。日本の觀光客が多勢訪れている。「楓橋夜泊」の詩文の石刷りを売っている。

## 本部だより



一、本会25周年大会期日と会場決定

期日 平成11年10月31日(日)

会場 中野区もみじ山文化センター

なかのZERO(小ホール)

大ホール申込み一案、三案の総べてアウトになり急遽コンピュータを駆使して会長が右の期日をとりました。どうぞ宜しく願います。

一、自分の持物には、努めて記名をしましょう。大会等会合の度に、忘れ物があります。教本等記名があるとき連絡できます。プログラム等貰ったら自分の物にすぐ記名しましょう。

一、挨拶は大切です。お互いに励行しましょう。「お早うございます」「さようなら」は基本です。いつ見えて、いつ帰られたのか分からない方がありません。一親しき仲にも礼儀あり」です。

一、会報の原稿・写真の提出について  
本会指定の原稿用紙に楷書できちんと書くこと。  
写真は明暗のハッキリしたものがよい。  
原稿用紙請求は本部へ。

## 習志野会五周年を迎えて

習志野会・会長 広瀬正龍

顧みますと、習志野会の発会式は京成津田沼駅近くのザ・クレストホテル三階桃の間での船出、新緑の候、晴天の平成五年五月八日(日曜日)でした。吉永両先生、旭龍先生(典子先生)始め当時船橋教場の会員の方々のご臨席のもと厳粛に且つ有意義の内に両先生の心温まるお祝のお詞と、励ましのお詞、重ねて素晴らしい吟のご披露と併せて旭龍先生の名吟には、習志野の新会員の皆様も感激ひとしおでした。その雰囲気は二次会で絶頂に達し、時間のたつのも忘れる程、両先生と会員の親しく又和やかなひとときを過ごした當に記念すべき一日でした。

開設当時は八名の会員からのスタートでしたが、五年の歳月の内には退会された方、新たに入会された方、再度入会された方、と言う色々な出会いを経験いたして来ましたが、お陰を以て現在在籍精進しておられる方が十三名を数える迄に成長した事は嬉しい限りに存じます。

南洲吟道会の会則内規では、十五名以上の会員を持つ教場には南洲吟道会の名を戴ける事になっておりまして、早くその栄に浴したいものと努力致して参りましたが、なかなか困難なものがありまして、思いが叶いませんでした。しかし、吉永理事長先生は、可能性を高く評価され、十三名ではあるがその名を冠されました。その重責を担うには余り有る感は致しますが、その名を冠するからにはこの名を汚すことのない様に精進に精進を重ね邁進する覚悟であります。

発会の足掛かりを付けて下さった人(井戸を掘って下さった人)については発会式の当日ご披露申し上げましたので省かせていただきますが、深甚なる感謝の念は現在も些かも変わることもなく唯々頭の下がる思いです。

私が今日、詩吟を学べるようになったのは、素晴らしい指導者としての吉永両先生との出会いを導いて下さった、同郷であり、幼少の頃から同級生でもある加藤孝龍先生との二十有余年ぶりの再会の賜と深く感謝申し上げます。

こんなに素晴らしい出会い「一期一会」があり、育てられました。またとない良き同士、良き会員の皆様には恵まれます。いつもその幸せを感じつつ吟道を歩んでおります。

「敬天愛人」と吟道報恩を二本の柱として、引き続き吟道に精進して参ります。

相変わらませぬ御高導御鞭撻賜りますようお願い申し上げます。



子供は親を選べず  
生徒は先生を選べず  
国民は首相を選べない

(10・8・11付東京新聞一寸鉄)

されど吟道は  
師を選び会員を選び  
礼節を以て(学院規則第三条)学ぶ  
だからすばらしい!!

(吉永洲神)

